

万博開催都市の地域づくり

—AVE の目指すもの、そして AVE シンポジウムで得たこと—

名古屋学院大学 木村光伸

1. はじめに

2005 年日本国際博覧会（愛知万博：愛・地球博）は 2200 万人を超える入場者を得て、成功裡に幕を閉じた。国際博覧会に限らず、国際的なメガ・イベントを考える際には、開催の成功（あるいは失敗）をどのような尺度で測るのが最適であるかという「ものさし」づくりが先ず大切である。その物差しとなる基準は千差万別であり、判定者の価値観によって評価が左右されかねないという脆い側面をも併せもっている。

愛知万博が成功したのは 2200 万人の入場者のおかげなのか、それとも 120 を越える参加国と国際機関や企業の協力の成果なのか、あるいは開催主体となった都市・地域の努力なのか、はたまた地域でボランティアに活動した数万人（関連イベントなどを考慮すれば、間接的にはその何倍かになるであろう）の市民の自発的な活動によるのか、などなど。どれをとっても重要な視点であり、要因である多数の関係評価項目があり、その外部には地域インフラ整備、都市再構築、経済的波及効果、国際交流や文化活動の活性化などの評価対象とその評価結果が存在する。

博覧会は一過性のメガ・イベントである。大阪万博開催の中心人物であり、日本における博覧会に係る第一人者でもある堺屋太一氏はそれを「聖なる一回性のイベント」であり、国家事業としての規模と成果が要求されるものと説いてきた。会場問題を巡って混迷を極めた愛知万博では堺屋氏の意向は最終的には取り入れられなかったが、彼の発言が逆に「博覧会後に残すもの」「開催都市における今後の持続的努力」を行政や市民に考えさせる契機となったことは特筆しておくべきであるかもしれない。

国際博覧会という「聖なる一回性のイベント」は、開催地において「地域づくり」として継承されねばならないのである。

2. AVE—その組織と目的—

愛知万博（2005. 3. 25. -9. 25）の開催に合わせて、9 月 22 日に万博開催都市・地域連盟（AVE：the Association of Cities and Regions Hosting

International Exhibition) による「万博開催地サミット 2005 in 愛知」(第 2 回 A V E 総会および公開シンポジウム「万博と地域づくり」) が開催された。この会議には過去に万博を開催した都市、これまでに開催のエントリーをした都市、およびこれから万博開催を希望する都市など 25 都市・地域からの参加があり、2010 年に開催を計画している上海からも周禹鵬氏(上海市副市長)が出席され、シンポジウムにおいて上海万博の理念と基本構想および万博に伴う地域開発について報告された。

A V E は 2000 年に開催されたハノーバー万博の際に提案され、設立された万博開催地の連携を図るための国際組織であり、2002 年にセビリアにおいて第 1 回総会が開催されている。A V E の目的は連盟規約第 1 条において、下記のよう

A V E 規約第 1 条(目的)

万博開催都市・地域連盟は在パリの B I E (博覧会国際事務局) との密接な連携の下、以下を目的として活動する。

- (1) 万博開催の経験を有する都市・地域間の連携活動を構築し、維持すること。
- (2) 広く一般に万博の役割に対する理解と認識を促すこと。また、過去の万博の遺産の保全に務めること。
- (3) 万博開催後の展開について意見を交換すること。
- (4) 将来の万博を支援し、今後万博を開催する都市・地域の開催準備に協力すること。

今回開催されたサミット 2005 では、A V E の目的・趣旨をふまえて「万博と地域づくり」をテーマに掲げ、これまでの万博開催都市・地域が展開してきた博覧会後の都市づくりや愛知万博の開催地域が地域づくりのために取り組んだ方向性とその成果について報告・議論し、さらに B I E の承認の下でこれから万博が開催されるサラゴサ(スペイン、2008)と上海(中国、2010)からのプレゼンテーションを得た。

本稿では万博が地域づくりとどのように関係づけられるべきかという点について、これまでの経験、愛知万博の教訓を改めて検証し、上海万博における新しい地域づくりの目標設定のための方向性を探ることを目的として論を展開したい。

3. 愛知万博と「環境問題」

万博開催都市・地域における普遍的課題としての地域づくりを考察する前に、

今回の愛知万博で論議された諸点を整理しておこう。その中心は博覧会における開発と環境保全の問題である。愛知万博ではとくに会場建設をめぐる諸問題、とりわけ会場造成が直接的に地域の緑環境を破壊するという「環境をテーマに掲げた博覧会における最大の矛盾」が、開催に至るプロセス上の主要な混乱の原因であり続けた。しかも同時に愛知万博はあくまでも「地域づくり」の中で「共生」をキーワードとして掲げ続けなければならなかったのである。この問題は博覧会場の問題であると同時に博覧会を開催する主体である地域自治体（地方政府）の地域づくりそのものの姿勢とも大いに関係する事柄である。この問題について筆者はすでに小論（都市計画, Vol. 54-2, 2005）を公表しているので、その部分を以下に抄録する。

愛知万博は当初「技術・文化・交流—新しい地球創造」というテーマで構想されていた。「基本構想」（1994）で注目されるのは、会場構想のなかで明確に「自然と共生し、持続可能な開発を実証する会場」が謳われていることであろう。しかし同時に、そこには「あいち学術研究開発ゾーンの中核的な地区」での会場づくりが「将来の地域振興や活性化に発展的に生かされ」ることも企図されていて、つまりそこで言うところの「共生」の意味内容は、時代の趨勢によっていかようにも変転自在のものとなる可能性を孕んでいたのである。それが愛知万博の初期計画段階からわれわれが引きずってきた呪縛となる。

博覧会の誘致活動や基本構想づくりと平行するように、瀬戸市南東部地区整備事業のあらましが明らかとなる。私の手元に「森の中に未来が生まれる」という愛知県作成（発行年不詳）の小さなパンフレットがある。この資料が作成された時点ではすでに博覧会のテーマは「新しい地球創造：自然の叡智」（Beyond Development : Rediscovering Nature's Wisdom）と変わり、「21世紀の新しいまちづくり懇談会」から始まる構想推進の流れが愛知学術研究開発ゾーンの中核拠点としての瀬戸市南東部地区新住宅市街地開発事業いわゆる「新住事業」を推進していく原動力となっていくことがわかる。そしてパンフの中には「このまちづくりの過程で2005年日本国際博覧会が開催されます」という今博覧会最大のネックポイントであった構想が踊っている。

1990年前後から瀬戸市南東部の丘陵地にはハイキングでもピクニックでも山仕事でもない人たちの小集団が頻繁に見られるようになる。彼らの目的は自然観察。それは専門家の仕事でもなく、ひたすらひとつの単純な疑問から行為されるものであった。「どうしてこの森を壊すのか」「どうしてここが新住や万博で緑の墓場とならねばならないのか」という素朴な、あるいは従来型地域開発のイロハをも知らない素人集団の問いかけに答えるものは誰もいなかった。それでも彼らは歩きつづけ、多分野の自然や環境保全の専門家をも巻き込んで、

いわゆる「海上の森」を環境危機のシンボルに祭り上げてしまったのである。後に博覧会国際事務局 B I E から「博覧会を利用した大規模開発」と非難され、会場問題を混乱の極に陥れた難問は、ごく普通の主婦らが計画の当初から直感的に指摘していたことに他ならなかった。20 世紀型手法が 21 世紀的市民（彼ら自身はまだそのことに気づいてはいなかったのだが）の問いかけに敗北するプロセスはそのときに始まった。

都市の再開発の手法として国際博覧会が「活用」されることは決して稀有なことではない。むしろ多くの博覧会はそのように構想され、そして大きな成果を上げてきた。そのことは率直に認めよう。だが、今回の博覧会に随伴する、というよりも前提的に利用された開発は、再開発と言うよりも往時の日本列島改造にも似た地域整備手法であったことは否めない。すでに地球サミット（1992）では地球環境の絶対的危機が叫ばれ、人間を含めた生物相全体の持続的な生存への努力が求められつつあるこの時期にあって、なぜ海上地区の開発が是認されるのか。そのことに対する異議申し立てが博覧会開催そのものへの反対行動として現出したことは、ある意味では当然のことでもあったのだ。

紆余曲折の末に愛知万博の基本テーマは「新しい地球創造：自然の叡智」ということで落ち着いた。本来、人間の知恵に対して付与されるべき「叡智」が能動的意志をもたない「自然」の属性として捉えられたこのテーマのユニークさは、同時に人間と自然の対立的構図では 21 世紀の人間社会のあるべき姿が描ききれないという哲学的な根本問題を指し示すものでもあった。このテーマが設定された際に示された「基本理念」では、「人間に惜しみなく、その富を与え続け」た自然に対して、人間は「十分にむくいることがなかった」と総括し、「そのために、人間は愛を、失い始めている」と規定している。21 世紀の私たちに求められているのは「自然と生命への共感にみちた、叡智のふるまい」であり、「自然自身の本質を、あらわにし、輝きださせるため」の技を求めなければならないのだとする。私たちと自然との間には「叡智にみちた新しいインターフェース」が必要なのであり、そして「その試みが、日本の小さな森ではじまろうとしている」というのである。小さな森が当時の会場予定地であった海上地区を意味することは明らかであるが、私はこの理念の中に「歴史的に形成された日本の自然観」がこれから果たすべき役割を読み取るべきであると考えている。この視点においてのみ、環境は国際博覧会のテーマとなりえるのだ。21 世紀のいまにいたってなお「技術の進歩が環境問題を解決できる万能薬」であると考えていることは、「自然を制圧し人間の論理で自然を改造するという 20 世紀的手法」と同様に愚の発想である。環境をテーマに博覧会を開催することは私たちの自然観を磨くという行為に他ならない。それがイベントとして面白いかどうかは別にしても、愛知万博はそのようなテーマをもって構築されたはずである。

海上の森が「博覧会」と「新住事業」という二重の計画の上にあつて、自然が蚕食されるという危惧は、「自然の叡智」が基本コンセプトの底流にある限り、誰の目にも明らかであり、事業者にとってもけっしてバラ色の計画であつたとは考えにくい。森の中に浮かぶ近未来都市が本当に自然と調和的であるのか、あるいはそのようなものがかつて都市計画技術者が思い描いたような「共生型地域づくり」となり得るのか、さらにはそのような計画を前提として国際博覧会が構想されるべきであるのかなど、明示されるべき解は多様であるにもかかわらず、その前提となる会場条件はあまりにも硬直的であるといわねばならなかっただろう。里山を壊すという単純明快な現実を前に、環境に配慮した博覧会の会場づくりという主張はすでに論理的に破綻していたというべきである。それでも愛知万博の会場は海上の森でなければならなかった。そのとき、海上の森の上空をオオタカが舞った。それは破壊の上に新しい未来を築くという手法についてのエピローグであつたのかもしれない。

B I E の最後通牒を受けて、会場問題は大きく進路を変更し、海上の森の大半は手付かずのままに残されることとなった。同時にこのような決断が、愛知万博を環境技術博に変節させたということもできるかも知れない。「自然の叡智」は「生命の星である地球」と「生命」の意味を考えるための概念装置であつたはずだが、「生命」を慈しむという新しい生き方への発想は「技術」に未来を託すという技術路線に置き換えられたような気がする。

(木村光伸, 2005. 環境博覧会と地域創造の生態学. 都市計画, Vol. 54-2 : 20-23)

愛知万博においては周辺における交通インフラの整備（リニアモーターカーの実用化と高速道路網の整備および周辺道路の改良）と中部国際空港の開港という地域開発型事業が付随していた。それらの一部は新住宅構想の消滅とともに縮小・中止されたので、博覧会による公共事業投資による地域開発というシナリオは不完全なものとならざるを得なかった。また当初の会場予定地が大幅な変更を余儀なくされた結果、博覧会の中心的な母都市として名乗りを上げていた瀬戸市にとっては、大きな誤算が生じた。それは都市整備のあり方にも影響を与えたが、瀬戸市は必要最小限の整備と既存施設のネットワーク化でそれに対応し、博覧会開催の実を挙げたといえよう。

4. AVEシンポジウムが提起した問題

(1) 問題の所在

「万博開催地サミット 2005 in 愛知」は2つの基調講演と3部構成のシンポジウムからなり、筆者はシンポジウム全体のモデレーターとして企画の段階か

ら参与し、ほぼその目的を達成したと考えている。

基調講演で、2005 年日本国際博覧会協会のマリ・クリスティーヌ氏は愛知万博を「環境配慮型」「多様な参加型」「未来実験型」という 3 つのタームで表現し、その原点にある「コミュニケーション」の重要性を主張された。氏は博覧会の持つ特性の中で人間のつながり、文化の交流という視点をとくに強調することによって、愛知万博の成果を特徴付けたといえるだろう。

二人目の講演者のピーター・ヴァン・ヴェセメル氏（建築家・都市プランナー）は「万博の目に見えない心」というタイトルで、現代の万博が「工業社会から脱工業社会の変換期」のイベントとなっていること、そしてそれが「新しい社会・都市の模索」でなければならないことを主張し、そのためには博覧会の評価というものをきちんと考え直す必要があるということを主張した。彼は次のように述べた。

万博の影響は通常テーマ的に測定がされます。来場者の数、展示種の数、参加国の数、またその場所の広さ、現金収入の額などです。すべて前回よりも大きければいいという考え方です。しかし、世界万博というのが実際に来場者に対して、またその都市、地域に対してどういった影響をもたらすかということは、こういった定量化では測ることができません。すなわち、そういった意味では、我々は実際に来訪者のかたがどんなことを学ばれたかを、全く分かっていないということなのです。彼らの考え方、行動に、すなわち集合的な社会、文化全体として、どのような影響をもたらしたかが分からないということです。この成功、また万博の長期的な影響は、やはり正確にこういった観点から考えなければならないと思うわけです。（A V E 公開シンポジウムにおける発言）

筆者が先に主張したのと同じく、彼もまた評価のものさしを問題にしている。博覧会の成果や開催効果をどのような数字で論じても、われわれや来訪者が、そこで何を学んだのかということが明晰でなければ、真の評価とはなりえない。そういう点から見ても地域へのインパクトを推量するシステムが、博覧会開催の前から準備されていなければならないのであろう。愛知万博において、名古屋学院大学の E X P O プロジェクト研究チームは研究の最重要項目として「地域」というキーワードを掲げてきた。そのあたりの詳細は小林甲一教授の論文「博覧会の開催と開催都市の地域政策—国際博覧会の発展と日本における博覧会の展開」（2005. 11. 復旦大学におけるシンポジウム）に詳しいが、結局は地域の動きをどのように推量するか、ヴェセメル氏の表現を借用するならば、「万博の目に見えない心」を如何に評価するかということなのであろう。

そういう理由から、シンポジウムは「万博が地域に与えたインパクト」「万博への市民参加と地域づくり」「将来の万博と地域づくり」という3つのテーマで括られたのである。

(2) 万博が地域に与えたインパクト

明日のモダンな社会を作るという目標の中で、まさに博覧会は、社会における構造改革であり、その実験の舞台であるとヴェセメル氏は表現したが、われわれの愛知万博も、長く険しい道を辿りながら、そういうことを目指してやってきたのである。

実際に多くの国際博覧会においては、博覧会の開催を次の都市戦略と繋げてきたのであって、近年の大型の国際博の事例を見ても、セビリア市やハノーバー市の経験は、次の博覧会開催都市がそこから学び、あるいは万博開催都市としての成果を持続的に活かしていくための先進例として重要であろう。

セビリア万博の成果について、アルフォンソ・セオアネ・ヤルザ氏（セビリア市）はスペインの当時の状況を踏まえて次のように総括した。スペインは17の自治州から構成されており、EUへの加盟という政治経済上の重要な時期において、当時の後進的地域であるアンダルシア州への直接的投資には多くの困難が付きまとっていた。その合意形成を得るための大きな仕掛けが万博の開催ということである。但し、急激な投資はその地域で短期間に消化するには重過ぎるということもセビリアは経験し、その後の継続的な発展に相当に時間を要したという問題点も残したというのである。セビリア万博の跡地は Cartuja93 というプロジェクトによって引き継がれテクノポリス、産業都市などの再開発が継続的に行なわれているが、当初はその進展が遅く、跡地計画の失敗事例ではないかという評価さえあった。それはスペイン国内における批判でもあった（たとえば2002年の訪問調査の際に、バルセロナの当局者は自らのプロジェクトとの比較においてそのように明言した）が、近年に至って再開発は軌道に乗り始め、地域内に進出する企業数、従業者数も順調に伸び始めている。この問題については筆者もかつて別稿で報告したことがある（「メガ・イベントと地域開発—セビリア・バルセロナから学ぶ—」『国際博覧会を考える—メガ・イベントの政策学』所収、晃洋書房、2005）。

他方、ハノーバー万博は幾つもの意味において万博の歴史の転換点であったのではないかとされている。そこでは地球に住む者が共有する環境というものテーマとして博覧会が行われた。これからの人間の新しい生き方に迫った博覧会として、あるいは20世紀型から21世紀型への世界観の、大きな転換を象徴する博覧会だったという意味で歴史に残るものであったが、ハノーバー万博にも、成功だ、失敗だといろいろな評価がついて回っている。その評価につ

いてハノーバー市長のヘルベルト・シュマルシュティーク氏は次のように論を展開している。

ドイツでの万博というものを考えたのが 80 年代後半であり、その考えというのは、「ドイツ・メッセ AG」という見本市会社が考えたものであった。この会社は、ハノーバー市とニーダーザクセン州によって作られた会社で、この地域にある世界最大の見本市会場を、この世界博覧会を誘致することによって、21 世紀に対応する見本市会場やホールに一新するチャンスでもあった。インフラも未来に向けて整備していかなければならなかったということであり、ハノーバーは既存の会場を利用して万博を始めることができた。

万博会場用地の 60%は見本市用の敷地であり、ハノーバーにおいては、新しく開発をしなければいけない土地は、残りの 40%だけであった。既存のインフラを利用して、新しく活用することが可能であることを示す、博覧会史上、最初のステップとなった。

このような持続可能な万博という都市の考えは、既存の会場を新しくして利用することだけにはとどまらず、ハノーバーとその近郊地域は、万博によって交通インフラを最適な形に整備され、当地域の公共交通機関は、単に近郊地域間を結ぶ道路というだけではなく、ハノーバー地域を横断し、統一ドイツの中心としてハノーバーを位置づける強力な交通システムとなってきた。

ハノーバーおよび近郊の住民は約 100 万人程度であるが、万博のような国際的な催事をしっかりと受け入れる姿勢があり、過去に行われた国際的な見本市を通じて、ハノーバー人は、自分たちが国際社会に対し柔軟かつ寛大であるということを自覚している。また、ハノーバーの万博会場付近にある、持続可能な環境保護を目指した新しい宅地も、新しい若い世代の家族を対象としており、特に若い家族用に 3800 の新しいアパートがすでに造られている。

さらには観光も促進した。ハノーバーおよび近郊における宿泊客の収容能力は非常に拡大し、毎年 4～8%程度、観光客の数が増加しつつある。

2000 年ハノーバー万博におけるソフト面での成果としてはワールド・ワイド・プロジェクト構想があげられるが、それは未来への懸け橋であった。万博と万博をつなぎ、そして世界中の興味深いプロジェクト構想を持つ万博の開催地どうしが、継続的で互いの経験から学ぶネットワークを構築することが、将来の博覧会に求められるものであり、また万博にしっかり参加していく地域社会を形成していくことにつながると思われる。とくにハノーバー万博期間中に行なわれたグローバル・ダイアログ（世界の対話）は、NGOが、持続可能で平和なグローバル・ビレッジ（世界村）の、地球規模での必要性において議論し合うフォーラムであったが、このような経験は今後の博覧会へも継承され

るべきである。

(A V E 公開シンポジウムにおける発言要旨)

ハノーバー万博における最大の成果をハードとソフトの両面から評価するならば、そこに次世代型の博覧会のあり方が見えてくる。「将来を見通した会場づくり」は地域計画そのものであり、市民活動の新たな展開を促進するものなければならない。また博覧会で強調されるのは「対話の努力」であり、それはさまざまな人的交流の仕組みの中で実現されるというものであろう。

このようなハノーバーの経験を愛知万博はどのように継承したのであろうか。愛知万博の推進者の一人、長谷川信義副知事は、A V E のシンポジウムにおいて、愛知万博が愛知県に与えたインパクトとして「地域づくり」「環境先進県づくり」「世界的な交流拠点地域の形成」の 3 点を挙げている。「地域づくり」とは交通インフラを含めたハード的整備とボランティア活動支援やN P O など市民参加活動の促進といったソフト面での支援であり、「ものづくり拠点」である愛知あるいは中部圏の特性を活かした地域づくりを目指すものである。また、今回の万博の理念や成果、あるいは博覧会を通じて行なわれた環境対策実証実験などの成果を継承し、「環境先進県」としての地域形成を志向するという。さらには愛知万博の開催により、飛躍的に向上した当該地域の知名度を活かし、海外から人と組織を誘引できるような活発な交流活動が展開される国際交流拠点としての地域づくりを進めるとともに、県民全体の草の根レベルでの国際交流など、万博で培った取り組みをさらに充実させる、というものである。

このような試みは開催地の一部となった瀬戸市でも模索されている。増岡錦也瀬戸市長によれば、博覧会の最大の成果は「瀬戸の知名度の向上」と「市民の自信の獲得」であったという。外挿的に与えられる万博効果を漠然と待ちわびていた瀬戸市民が、博覧会計画の推移と会場そのものが瀬戸市から遠ざかることによって受けた挫折の末に、イベントに主体的に取り組み、地域づくりに参加することの喜びを体感したことは、今後の地域づくりへの大きな力となるであろう。そういう意味で瀬戸市民は 21 世紀的自立の道を歩み始めたのだといってよいだろう。

万博が地域に与えるインパクトは多様だが、都市基盤形成以上に当該地域住民の都市政策への参加の促進という点が特筆されるべきなのではないだろうか。それを行政当局が如何にうまく引き出せるか。そのあたりがメガ・イベントを通した地域づくりの成否に繋がる大きなポイントなのである。

(3) 市民参加のシステム

国際博覧会における「市民参加」という言葉は、特にハノーバー博覧会から

強調されるようになり、現在ではメガ・イベントにおける市民の活動が当たり前のような風潮さえ出てきている。「市民参加」という言葉は、いかにも市民、普通の人々が事業の主人公になるという意味ではとても素晴らしいことなのではあるが、そのような言葉どおり、本当にわれわれの市民参加が動いているのかどうかについては少し検証しておく必要がある。

愛知万博で市民参加のプロデューサーを務めた小川巧記氏は博覧会における市民参加を

「21 世紀の時代のエンジンは何かと考えたときに、私は、それが「市民」ではないかと考えました。つまり、普通の生活者です。あるいは個人と言ってもかまいません。つまりユーザーです。この時代と地球と一緒にユーズする、そういう個人こそが、この 21 世紀の時代のエンジンとなるのではないかと。そして、その時代のエンジンこそが、地球的な課題、今私たちが本当に一緒に抱えている課題を解決するエンジンになるのではないかと考えまして、21 世紀最初の万博であるならば、まさにこの 21 世紀の時代のエンジンの市民個人の力を見せる万博でなければならない。そういう意味で、市民の力を見せる万博としての市民参加」(AVE 公開シンポジウムでの発言)と捉え、そのような仕組みづくりが必要であると考えていた。

そのような構想を実現したのが、関係市町における取り組みであり、万博史上初めて市民によって立ち上げられたボランティアセンターであったといえる。

関係市町による取り組みとしては行政単位で行なわれた「一市町村一国フレンドシップ事業」がその中心である。これは自治体住民が万博参加各国と個別に交流活動を展開するものであり、世界の未知の領域へ多くの市民を誘導し、成果を上げた。この運動は愛知県の施策とも連動しつつ、今後も継続される構想である。

また、愛・地球博ボランティアセンター経営企画委員長の榎田勝利氏によれば、ボランティアセンターは当初予想を大きく超える約 3 万人の登録者を得て、博覧開会最中には 1 日平均、約 600 名のボランティアが活動し、最終的には述べ約 11 万人のボランティアがそれに参加し、ボランティアが活動した総時間数は約 56 万時間となった。これは万博の協会がフルタイムとして雇った人数に換算すると約 7 万人の雇用に相当するという。

そういう中で、ボランティア参加の社会的な意義としては、博覧会におけるボランティアの参加が一般の市民・県民にとって、素晴らしい動機づけやきっかけになった。同時に、実践から多くのことを学ぶことができたと総括できる。また、万博を盛り上げるということで、さまざまな団体がネットワークを形成し、共通の目的のもとに活動することができた。さらに、さまざまな研修を行い、人づくり(人材育成)に大いに役に立ち、このノウハウは後にも継承でき

るのではないかと考えられる。今後の問題と関連して総括するならば、ボランティアセンターが自立した組織として活動したことが、今後の愛知県およびこの地域社会に大きな担い手を送り出す力となるという確信を得ることが出来た、と榎田氏は述べている。愛知万博を契機として設立されたボランティアセンターは、これからも社会の持続的な市民活動装置として、時代のエンジンとして働き続けることであろう。

このように、地域づくりの中で、市民参加を継続的に、かつ自律的に都市創造の力と指摘が必要であり、万博はそのような市民力を試す絶好の機会なのである。愛知万博で博覧会の様態は大きく変貌したとも言える。それはすなわち、見せる博覧会（観客としてみる博覧会）から、ともに行動する博覧会へ変わっていったということなのだろう。

(4) 将来の万博と地域づくり

ここまでの議論で、21 世紀における国際博覧会のあるべき姿が徐々に明らかになってきたと考えられる。過去の博覧会の経験やそれに基づく今後への問題提起は多岐にわたるものであり、国際博覧会の長い歴史と、それに携わってきた多くの都市・地域のあることを思えば、愛知万博を機にした総括さえも、博覧会の歴史全体の一つの一つの断面にすぎない。しかし、これから始まる博覧会、次なる国際博覧会の時代へ向けて、継承すべき多くの事柄を受け、サラゴサ、上海の博覧会が、これまでの国際博覧会の伝統のうえに新しい展開を見せ、21 世紀を人類の希望に満ちた未来へと繋いでくれるためにも、われわれは総括を必要としているはずである。結論は最後に回して、次なる博覧会への構想と決意を総覧してみよう。

スペインの小都市サラゴサ市は 2008 年に「水と持続可能な開発」をテーマとした博覧会を準備している。そもそもスペインという国は、過去に幾つもの国際博覧会やメガ・イベントを開催し、そのことで地域形成あるいは地域再構築の核としてきたという意味においてしたたかな歴史風土を持っている。

サラゴサ市長のホァン・アルベルト・ベヨッホ氏はこれまでの万博開催都市の遺産を二つの成果として捉えている。まず一つは、国際的なプロモーションができたということ。それから都市開発ができたということ。とくに、さまざまな建築プロジェクトや、あるいはインフラ整備などが行われたという意味での、都市整備ができたということである。彼は次なる主役がサラゴサ市であることを確信している。ベヨッホ市長の論点は明確である。彼は言う。「サラゴサ市の万博では市民参加があるというのではなく、市民参加によってサラゴサ市が開催地になった。万博の計画そのものが市民から出てきたプロジェクトであったとさえ言える」と。

その上で万博を成功に導くためにはいくつかの条件があるとして、①市民の参加とともに、万博の経済的な直接的な効果を堅実な形で評価しなければならない、②単にインフラの整備というだけではなく、実際にその投資のニーズに合った、そして長期的な観点から見た都市の整備を行わなければならない、③万博開催よりもずっと前に、その万博会場をどのように使うのかということをはっきり考えたうえで、会場づくりをしなければならない、④最初の段階から、すべてのプロセスから、民間の協力を得なければならない、という4点を指摘している。このような地域整備に主眼を置いた万博プログラムの設定が、真の市民参加のもとで展開されるならば、これまでにない成果を得ることも可能であろう。サラゴサ博のテーマである「水と持続可能な開発」が地域整備として目で見える形で表現される博覧会は、「私にとって心は見えるものだと思う」とベヨッホ市長が言うように、ヴェセメル氏の「見えない心」とは異なった地平を、博覧会として見せてくれるのではないだろうか。

この項の最後に上海万博にふれておきたい。上海市では、2010年に大規模な国際博覧会を開催すべく、準備が進みつつある。ハノーバー、愛知という二つの博覧会は、どちらかという環境配慮型という理念の突出した博覧会になった。これは21世紀の始まりとしては当然のことなのかもしれないが、今後の博覧会には幾つものたどるべき道があると思われる。サラゴサのやり方もそうかもしれないし、上海には上海のやり方があるかもしれない。では、上海はどのようなものを、どのように見せようとするのか。以下に上海市副市長の周禹鵬氏がA V E公開シンポジウムで行なったスピーチからいくつかの論点を挙げる。

2010年に準備している中国の上海万博が地域の発展とどういう関係があるか。上海万博の開催地点は上海市中心の黄浦江（Huangpu River）のウォータースフロントに選定された。黄浦江というのは、「上海の母なる川」といわれ、1600万人の上海市民を養っているばかりではなく、近代都市としての上海を形作ってきた。黄浦江の変遷の歴史は上海の発展の歴史でもある。黄浦江の川辺にあるバンド（外灘）という地域は1930年代にすでに太平洋西側にある極東の著名な金融の中心地であり、この独特な多国籍建築群というものが非常に広く知られる。黄浦江は、上海の歴史の変化を見届け、そして改革・解放の成果を見届けた後に、もう一度上海の新しい発展を見届けようとしている。

「Better City, Better Life」というテーマに基づいて行われる2010年の中国上海万博により、黄浦江沿岸の開発がスピードアップされ、そして上海の都市の機能がレベルアップされる。これによって調和の取れた都市が形成される。そして、2020年までに、上海を国際的な経済・金融・貿易・物流の中心の一つとする非常に大きな目標の実現に向かって歩んでいくこととなる。

(AVE公開シンポジウムでの発言)

上海万博で整備される都市のあり方を、周禹鵬氏は4点に整理している。①万博の開催によって上海の都市、旧市街地が改造され、そして開催地にもともと住んでいた住民たちの生活居住条件が改善される。②万博の開催により、上海の工業立地が調整され、都市の生態環境がより一層改善される。③万博の開催によって、上海の都市インフラの建設がスピードアップされ、そして上海の交通状況も大いに改善される。④万博の開催により、都市を再構成し、そしてより一層、上海の総合的なサービス機能のレベルアップを図る。さらに「**Better City, Better Life**」という万博の主題(テーマ)は万博期間中のテーマとなるばかりではなく、万博が終了したあとも、なおも上海の都市建設と発展に大きな影響を及ぼすと結論づけられている。

氏によれば、上海万博は上海地域の発展とともに中国の揚子江デルタ地帯の新たな発展ももたらすことか企図されている。揚子江デルタ地域は、上海市、また中国の江蘇省、浙江省の16の都市から構成され、この地域は中国の国土面積の1%を占め、人口は全国の6%を占めており、現在の経済規模は、全国の20%を上回るシェアとなっているという中国でも最も経済が発展した地域の一つである。揚子江デルタ地帯の経済が急速に発展することは、2010年の中国上海万博の成功をサポートするものであり、同時にまた万博の開催により、この地域の経済の発展を後押しするという相互関係の中で上海万博が開催されるところに、これまでの博覧会と地域整備との関係を大きく超えた姿が見えてくる。それは中国の経済、社会の発展を後押しし、そして中国がより広く門戸を開くことに繋がるが、一方でこれまでの博覧会が慎重に保ってきた経済至上主義との関係を改めて浮上させることともなるのではないだろうか。

周禹鵬氏は、「初めて一般博覧会を行う発展途上国として、私たちはAVEというこのプラットフォームを、非常に重要視しており、万博を開催したことのある都市から学び、そして現在、万博を開催している愛知県とも、いろいろと交流を図り、学びたい」と述べて、これまでの万博から謙虚に学ぶ姿勢を明確にした。AVEのメンバーとして、万博と地域開発を考える立場を示したものとして、今後の万博開催都市のリーダーとなる第一歩を踏み出したという評価が適当ではないだろうか。

5. 博覧会と地域づくりのシステム—AVEの役割—

ここまでの議論で、国際博覧会が都市と地域を変える大きな力を持つことが明らかとなった。その事例はすでにセビリヤやハノーバーで示され、今さらに愛知万博がその開催のプロセスと会期中の活動で現実のものとしたのである。

問題はこれからもそのような「地域づくり」の核であり、起爆剤であり、持続的開発のプログラムの始めの一步であるような博覧会を多くの都市において開催し続けることが可能であるのかという点に帰結する。B I Eのロセルタレス事務局長は、①万博はまさにポジティブに、前向きな形でもって都市を変えていく、②万博というものは、すなわち将来にわたって都市の生活と調和し、統合をもたらすものでなければならない、③万博というのは一過性のものではなく、エキスポ自身が都市のハードにならなければならないし、都市を進めていくイニシアティブにならなければならない、という考えを示している。

万博を通して、われわれは持続可能性というゴールに向かわなければならない。ロセルタレス氏はこれを大きな目的であると考えている。だからこそ、「持続可能でなければ、開発とは呼べない」わけであり、「将来へ遺産として受け継がなければならない」というのである。愛知万博が提起し、会場において具現化しようとした「自然の叡智」が、そのようなものとして理解され、地域と地球の将来計画に重要な役割を果たすことが出来るかどうか、愛知万博の最も重要な評価の物差しとならなければならない。

長い議論を経て、A V Eの公開シンポジウムで得た結論を、筆者は次のように取りまとめる。

1 番目は、国際博覧会は、世界的な文化の交流という最大の原則を持っている。それは、グローバル化しつつある現実世界の動向の中で、だからこそ、なおさら多様性の認識と尊重という意味において、ますます重要性を帯びている。

第2点目は、国際博覧会は世界の人々が平等に、公平に、対等に交流する機会を提供する。このことを通して、いかなるテーマの博覧会であっても、人類の平和、生命の尊厳、自然との共生、持続的な地球の維持というものを主張し続けるものなのである。

3点目は、国際博覧会がそれにふさわしい都市・地域で開催されることは、単に世界が一堂に会する場を提供することにとどまらず、当該の都市・地域が、世界に開かれた文化・芸術・産業、そしてあらゆる意味での人間活動を通して、世界の主要な一員であることを主張するものである。

4番目は、国際博覧会の経験は、その開催都市地域における将来ビジョンを豊かなものにし、都市・地域の新たな、そして国際的な視野に立ったまちづくりにこれまでも貢献してきたし、これからも貢献し続けるであろう。

5点目は、国際博覧会を経験し、また今後その活動に参画することを目指す、すべての都市・地域は、国際博覧会の精神、B I Eの指針に従って、協力して地域づくりを推進していくであろう。

最後に、これからもA V Eに参加する各都市・地域が相互に情報を交換し、共有しつつ、次世代の博覧会の取り組みに協力するとともに、新たな課題に挑

戦する先進都市として活動していくであろうという確信を、AVEのシンポジウムで得ることができたのだと思う。

これらを指針として国際博覧会はこれからも地域創造、地域づくりのモデルを提供し続け、都市のブランド力をさらに高めるために貢献するに違いない。上海万博はそのような直近のモデルのひとつとして、注目すべき存在なのである。